ゼミノート #4

Deformation Theory

七条彰紀

2018年7月24日

1 Automorphism Group of Stable Curve

[4] 3.A, [6] §1 を参照する.

C,D:: stable curves of genus g over a scheme S の間の isomorphism group の scheme としての構造を与える。この scheme を $\mathrm{Isom}(C,D)$ と書く。そして $\mathrm{Aut}(C)=\mathrm{Isom}(C,C)$ と定義し,これの scheme としての特徴を調べる。

Isom(C, D) の特徴付けをするため、次の関手を考える.

$$\mathcal{I}som_S(C,D): \quad \text{(Scheme over } \mathbb{C}) \quad \to \qquad \qquad \text{(Set)}$$

$$S' \qquad \qquad \mapsto \quad \{ \ C \times_{\mathbb{C}} S' \to D \times_{\mathbb{C}} S' \ :: \ S'\text{-isomorphism} \}$$

 $\iota\in \mathit{Isom}(C,D)(S')$ から得られる ι^* は $\omega_{C\times S'/S'}^\circ=\iota^*(\omega_{D\times S'/S'}^\circ)$ を満たす。また \otimes と交換する(すなわち Picard 群の間の準同型である。[2] Ex II.6.8)。このことから $\mathrm{Isom}(C,D)$ が適当な r をとると PGL(r+1) の部分群として書けることが分かる。

もう少し詳しく $\operatorname{Isom}(C,D)$ を書く. $n \geq 3$ を整数とする. 次のように r,d をとる.

$$r+1=h^0((\omega_{C/\mathbb{C}}^\circ)^{\otimes n})=(2n-1)(g-1), \qquad d=\deg(\omega_{C/\mathbb{C}}^\circ)^{\otimes n}=2n(g-1).$$

すると [2] II.7 より,C,D は $\mathbb{P}^r_{\mathbb{C}}$ の次数 d,arithmetic genus g の closed curve とみなせる(\mathbb{P}^r に埋め込める). なので Hildert scheme :: $\mathcal{H}=\mathcal{H}_{d,g,r}$ の点として扱うことが出来る.ここで次のように射を定める.

$$\mu: PGL(r+1) \rightarrow \mathcal{H} \times \mathcal{H}$$

$$\alpha \mapsto (\alpha \cdot [C], [D])$$

すると、 $\mathcal{I}som(C,D)$ は $\mu^{-1}(\Delta)$ によって表現される $^{\dagger 1}$. これを group scheme over \mathbb{C} :: $\mathrm{Isom}(C,D)$ とする. scheme over \mathbb{C} :: X について少々一般の理論を述べる。 $\mathbb{I} = \mathrm{Spec}\,\mathbb{C}[\epsilon]/(\epsilon^2)$ とおく (ref. [4] 1). [2] Ex II.2.8 より、 $t \in \underline{X}(\mathbb{I})$ は X の \mathbb{C} -rational point :: x と $T_x(X) = \mathfrak{m}_x/\mathfrak{m}_x^2 = \mathcal{T}_x$ の元に対応する。ここで \mathcal{T} は tangent sheaf :: $\mathcal{T} = \mathcal{H}om_{\mathcal{O}_X}(\Omega_X, \mathcal{O}_X)$ のことである。[4] でいう regular vector field とは \mathcal{T} の section のこと (と思われる)。

$$\Delta \cap \operatorname{im} \mu = \{ (\alpha \cdot [C], [D]) \mid \alpha \cdot [C] = [D] \}$$

の PGL(r+1) への逆像なので、この点と C,D の間の同型と対応することが分かるだろう.

^{†1} $\Delta \bowtie \mathcal{H} \times \mathcal{H} \oslash \text{diagonal set. } \mu^{-1}(\Delta) \bowtie$

定理 1.1

C:: stable curve of genus q > 2 について,

$$\operatorname{Ext}^{0}(\Omega_{C}, \mathcal{O}_{C}) = H^{0}(C, \mathcal{T}_{C}) = \mathcal{T}_{C}(C) = 0.$$

(証明). [6] §1.

 $\pi: \tilde{C} \to C$ を normalization of C とする. また \tilde{C} の connected component の個数を ν , それぞれの genus を g_i $(i=1,\ldots,\nu)$ とする.

今, $D \in \mathcal{T}_C(C)$ は pullback :: $\pi^* : \mathcal{T}_{\tilde{C}} \to \pi^* \mathcal{T}_C$ によって $^{\dagger 2}$. $\tilde{D} \in \mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C})$ C の double point に π で対応 する点 (point laying over double point, plodp) で 0 になるような regular vector field :: $\tilde{D} \in \mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C})$ に対応する (TODO). このような \tilde{D} は 0 しかないことを確かめれば, $\mathcal{T}_C(C) = 0$ がわかる.

主張 1.2

1点 $P \in \tilde{C}$ で $\tilde{D}_P = 0$ ならば, $\tilde{D} = 0$ である.

(証明). C :: reduced connected scheme に注意する. $P \in C$ において $\tilde{D} \in \mathcal{T}_C(C)$ が $\tilde{D}_P = 0$ を満たすとしよう. C の irreducible affine open cover :: $\mathfrak U$ をとり, $P \in U$ なる $U = \operatorname{Spec} A \in \mathfrak U$ をとって固定する. すると C :: reduced より A :: integral domain. $\tilde{D}|_U \in \mathcal{T}_C(U)$ が $P \in U$ で 0 になるのだから,次が成立する.

$$\exists u \in A - \mathfrak{p}_P, \ u \cdot (\tilde{D}|_U) = 0.$$

A:: integral より、これは $\tilde{D}|_U=0$ を意味する。U と交わる irreducible affine open subset of C:: $V\in\mathfrak{U}$ についても、 $\tilde{D}|_{U\cap V}=0$ なので $\tilde{D}|_V=0$. C:: connected なので、このように V を取り続けることで、全ての $V\in\mathfrak{U}$ について $\tilde{D}|_V=0$ であることがわかる。sheaf の Identity Axiom から、C 全体で t=0.

したがって我々は \tilde{C} の各 component は少なくとも一つずつ plodp をもつこと示せば良い.

 $\mathcal{T}_{\tilde{C}} = \mathcal{H}om(\Omega_{\tilde{C}/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_{\tilde{C}})$ なので、 $\mathcal{T}_{\tilde{C}}$ に対応する divisor は $K_{\tilde{C}}$. $\deg K_{\tilde{C}} = 2\tilde{g} - 2$ なので、 $\tilde{g} > 1$ ならば $\deg(-K_{\tilde{C}}) < 0$. したがって [2] Lemma IV.1.2 から $\dim_{\mathbb{C}} H^0(\tilde{C}, \mathcal{T}_{\tilde{C}}) = 0$. すなわち $\mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C}) = 0$. なので以下では $\tilde{g}_i = 0, 1$ とする.

 $\tilde{g}_i=0,1$ であるとき, \tilde{C} の各 connected component は必ず plodp をもつ.実際,genus formula で $\delta=0$ とすると

$$g = \sum_{i} (\tilde{g}_i - 1) + 1 \ge 2$$

したがって $\sum_i (\tilde{g}_i-1)>0$ ということになる.しかし仮定から $\tilde{g}_i-1\leq 0$ なので, $\delta>0$. すなわち C は必ず node をもつ. \tilde{C} の各 component は smooth であることと C が connected であることも踏まえて考えると, \tilde{C} の各 component は少なくとも一つずつ plodp をもつことが分かる.(この辺りは [6] Lemma1.4 で詳しく述べられている).

別証明として[3] Prop27.4 がある.

命題 1.3

任意の閉点 $P \in Aut(C)$ について、 $\mathcal{O}_{Aut(C),P} \cong \mathbb{C}$. 特に Aut(C) :: reduced scheme.

 $^{^{\}dagger 2}$ R :: ring, A,B :: ring over R とする. 一般に、k-homomorphism :: $\phi:A\to B$ があるとき、 $D\in \mathrm{Der}_R(B)$ は $\phi^*:D\mapsto D\circ\phi$ によって $\mathrm{Der}_R(A)$ 个写すことが出来る.

(証明). $X = \operatorname{Aut}(C)$ は group scheme over $\mathbb C$ であるから,X のある点での local な性質は transition を用いて単位元 e での性質と言い換えられる.なので $A := \mathcal O_{X,e}$ のみを考える.X :: group scheme over $\mathbb C$ より $e :: \mathbb C$ -rational point なので,A が体ならばそれは $\mathbb C (= A/\mathfrak m_A)$ と同型である.よって我々は A が体であることのみ示せば良い.

上記の定理 (1.1) から, $\mathcal{T}_C(C)=0$. これは $C\times\mathbb{I}$ の \mathbb{I} -automorphism は自明なものしか無いことを意味する(後述). さらに $\mathrm{Aut}(C)$ の定義から,これは射 $\mathbb{I}\to\mathrm{Aut}(C)$ としては自明なものしか存在しないことを意味する. さらに [2] Ex $\mathrm{II}.2.8$ より,これは $\mathfrak{m}_A/\mathfrak{m}_A^2=0$ を意味する.中山の補題から $\mathfrak{m}_A=0$. よって A は体である.

2 Definitions of Deformations and (Uni-)Versal Deformation.

定義 **2.1** (C-pointed scheme [7] §1.2.1)

scheme :: Y と \mathbb{C} -rational point :: $y_0 \in Y$ の組を \mathbb{C} -pointed scheme を呼び, (Y, y_0) と書く.

morphism of \mathbb{C} -pointed schemes $:: (S, s_0) \to (T, t_0)$ とは,moephism of schemes $:: \phi: S \to T$ であって, $\phi(s_0) = t_0$ を満たすもののこと.

定義 **2.2** (Deformation of Scheme [7] §1.2.1, [4] §3.B) (i) deformation of X とは、以下のような pullback diagram のことである. ψ から $X \cong \mathcal{X} \times_Y \mathbb{C}$ が誘導される.

$$\begin{array}{c|c}
X \longrightarrow \mathcal{X} \\
\xi : & \text{p.b.} & \text{flat, surj.} \\
\mathbb{C} \xrightarrow{s} Y
\end{array}$$

A':: local artinian ring with $A'/\operatorname{Nil}(A')\cong\mathbb{C}$ を用いて $Y=\operatorname{Spec} A'$ と書ける場合, これは abstruct lifting of X to A' とも呼ばれる ([8] 4.2).

- (ii) 上の deformation of X :: ξ について、S のことを ξ の parameter space、X を ξ の total space と呼ぶ.
- (iii) 任意の scheme :: X と \mathbb{C} -pointed scheme :: (S, s_0) に対して、S が parameter space であるような deformation of X が存在する:

$$X \longrightarrow X \times_{\mathbb{C}} S$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

$$\mathbb{C} \longrightarrow S$$

これを product family または trivial family と呼ぶ.

(iv) morphism of \mathbb{C} -pointed schemes :: $(T, t_0) \to (S, s_0)$ は,parameter space が S である deformation :: ξ から base change によって次の deformation を誘導する.

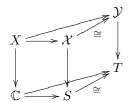
$$X \longrightarrow \mathcal{X} \times_S T$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

$$\mathbb{C} \longrightarrow T$$

これを元の deformation の $f:(T,t_0)\to (S,s_0)$ による pullback と呼び、 $f^*\xi$ と書く(このノート独自?).

(v) isomorphism of deformations of X :: $\xi \to \eta$ とは、以下の可換図式が成立する同型 $\mathcal{X} \cong \mathcal{Y}, S \cong T$ のこと.



isomorphism of parameter spaces :: $(S, s_0) \to (T, t_0)$ と deformation から誘導される deformation は元の deformation と同型である.

定義 2.3 (Universal Deformation, [4] 3.B, [3] §15)

universal deformation for X とは、次の性質を満たす deformation of X :: ξ (parameter space :: S): 任意 の deformation of X :: η (parameter space :: T) にたいし、morphism of pointed schemes :: $f:T\to S$ が 一意に存在し、 $f^*\xi\cong\eta$ となる.

Universal Deformation は、次の関手の表現対象であると言える.

$$\mathbf{Sch}/\mathbb{C} \ni S \mapsto \{ \text{Deformation of } X \}.$$

したがって全ての Deformation は universal deformation から得られる. しかし、当然ながらというべきか, universal deformation は殆どの場合で存在しない. そこで universal deformation への要求を

- $S' \to S$ & locally about S' にとるものとし,
- \bullet $U \rightarrow S$ の一意性は要求しない

と弱める. 一意 (uni-) ではないので、これを versal deformation と呼ぶ.

定義 2.4 (Versal Deformation)

(versal deformation の定式化が見つからないので保留. 見つけた限りでは versal deformation for scheme は次で意義する formal deformation でのみ定義されている. [1] では versal deformation for (complex) manifold が定義されているのみである.)

定義 2.5 (First Order Deformation)

 $D = \mathbb{C}[x]/(x^2), \epsilon = x \mod(x^2)$ とする. $\mathbb{I} = \operatorname{Spec} D$ の唯一の閉点を 0 で表す. $(\mathbb{I}, 0)$ 上の deformation ϵ , first order deformation (or infinitesimal deformation) と呼ぶ.

注意 2.6

X:: stable curve of genus g とする. first order deformation :: $\mathcal{X} \to \mathbb{I}$ は、moduli space の定義から、 $0 \in \mathbb{I}$ を $[X] = [\mathcal{X}_0] \in \overline{\mathcal{M}}_g$ へ写す $\mathbb{I} \to \overline{\mathcal{M}}_g$ に対応する.そしてこの射は、既に知られている通り Zariski tangent space at [X]:: $T_{[X]}$ の元に対応する.よって X の first order deformation から $T_{[X]}$ の元への対応がある.この対応は一対一であろうか?

補題 2.7

次の first order deformation of X を考える.

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{\psi} & \mathcal{X} \\ \downarrow & \text{p.b.} & \downarrow \\ \mathbb{C} & \xrightarrow{0} & \mathbb{I} \end{array}$$

この時, ψ は closed imm. かつ同相写像である.

(証明). まず $\mathbb{C} \to \mathbb{I}$ が closed imm. であり、closed imm. が stable under base extension であることから、 ψ も closed imm. また closed imm. ならば finite である ([2] Ex II.5.5b). ψ が homeomorphism であることは local on codomain(target) なもの^{†3}なので、 \mathcal{X} :: affine と仮定して証明すれば十分.

以上から、 $\mathcal{X} = \operatorname{Spec} A, X = \operatorname{Spec} R, R :: A$ -algebra, finitely generated as module と仮定して良い.また, $\psi ::$ closed imm. であるから, $A \cong R/I$ なる I :: ideal of R が存在する.また仮定から $A \otimes_D \mathbb{C} \cong R$ かっ A :: flat D-module.そこで以下の D-module 完全列に $\otimes_D R$ とする.

$$0 \longrightarrow \epsilon D \longrightarrow \mathbb{C} \longrightarrow 0$$

すると次のように成る.

よって $(\epsilon D) \otimes_D R$ 同様 I は nilpotent ideal (i.e. $I^2 = 0$).

 $X = \operatorname{Spec} R$ の閉集合として

$$\mathcal{X} = \text{Spec } A = V(I) = V(I^2) = V((0)) = X$$

なので im $\psi = \mathcal{X}$. ψ :: closed imm. なので, これで ψ :: homeo が証明できた.

定義 2.8 (Restriction of First Order Deformation)

上の命題にある first order deformation of X について, U :: open subset of X をとる. locally ringed space :: $(\psi(U), \mathcal{O}_{\mathcal{X}}|_{\psi(U)})$ を $\mathcal{X}|_{U}$ と書く.

3 First Order Deformation of a Nonsingular Variety.

補題 3.1

 $A:: \operatorname{ring}, X = \operatorname{Spec} A$ とする. この時, first order deformation of $X:: \mathcal{X}$ も affine scheme である.

(証明). [2] Ex II.3.1 への回答でもある.

 $\mathcal{I} = \ker(X \hookrightarrow \mathcal{X})$ とし, \mathcal{F} :: quasi-coherent sheaf on X とする.今,補題 (2.7) の証明から $\mathcal{I}^2 = 0$ が得られる.また,明らかに $\mathcal{O}_X/\mathcal{I} \cong \mathcal{O}_X$.したがって次の SES(short exact sequence) が存在する.

$$0 \longrightarrow \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F} \longrightarrow \mathcal{I}^{d}\mathcal{F} \longrightarrow \mathcal{I}^{d}\mathcal{F} \otimes_{\mathcal{O}_{M}} \mathcal{O}_{X} \longrightarrow 0$$

^{†3} local on codomain に考えれば、特に全単射性が示せる.

次の LES が誘導される.

$$0 \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X)$$

$$\longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) \longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) \longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X)$$

. . .

sheaf cohomology は abelian group の cohomology として構成されており、module structure とは無関係 に定まっている。そして X と $\mathcal X$ は homeo。したがって

$$H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d \mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = H^i(X, \mathcal{I}^d \mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = 0.$$

最後の等号は $\mathcal{I}^d\mathcal{F}\otimes\mathcal{O}_X$:: quasi-coherent \mathcal{O}_X -module と [2] Thm III.3.7 から得られる.

 $d=1(\implies \mathcal{I}^{d+1}=0)$ からはじめて d についての帰納法により

$$H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) = H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = 0 \ (i > 0).$$

よって LES から $H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) = 0 (i > 0)$. [2] Thm III.3.7 から \mathcal{X} :: affine.

補題 **3.2** ([7] Thm1.2.4)

X :: affine, nonsingular, finite type scheme over a field k とする. この時, X の first order deformation は自明な deformation :: $X \times_k \operatorname{Spec} D$ しか存在しない.

(証明). 上の補題から、deformation of $X = \operatorname{Spec} A$ は affine. そこで $\mathcal{X} = \operatorname{Spec} B$ とする.

$$B \xrightarrow{\longrightarrow} A$$

$$f \mid \text{p.b.} \mid$$

$$D \xrightarrow{\longrightarrow} k$$

f :: flat と、f の唯一の fiber :: $X = \operatorname{Spec} A$ が smooth であることから、[2] Thm III.10.2 より f :: smooth. 次の commutative diagram を考える.

$$B \xrightarrow{\longrightarrow} A$$

$$f \downarrow \qquad 0 \qquad \uparrow \mod \epsilon A$$

$$D \xrightarrow{\longrightarrow} A \otimes_k D$$

 $f::(\epsilon D\text{-})$ smooth over D なので、図式を可換にする射 $\phi:B\to A\otimes D$ が存在する.以下の主張から $\phi::$ iso なので、任意の deformation of X:: Spec B は自明な deformation :: Spec $A\otimes D=X\times\mathbb{I}$ と同型である.

主張 **3.3** ([7] Lemma A.4)

 $R:: \text{ring}, I:: \text{ideal of } R, F, G:: R\text{-module}, G:: \text{flat}, f: F \to G:: \text{homomorphism of } R\text{-modules}.$

I:: nilponent とし、誘導される homomorphism $f\otimes_R \mathrm{id}_{R/I}: F/IF \to G/IF$ が同型であるとする.この時,f:: iso.

(証明). $C = \operatorname{coker} f$ とする. 完全列 $F \to G \to C \to 0$ に $\otimes_R(R/I)$ を作用させる.

$$F/IF \longrightarrow G/IG \longrightarrow C/IC \longrightarrow 0$$

仮定から C/IC=0. 今 I :: nilponent なので $I\subset \operatorname{Jac}(R)$. したがって中山の補題から C=0. すなわち f :: surj.

 $K = \ker f$ とする. 完全列 $0 \to K \to F \to G \to 0$ に $\otimes_R(R/I)$ を作用させる.

$$0 \longrightarrow K/IK \longrightarrow F/IF \longrightarrow G/IG \longrightarrow 0$$

今, G :: flat から $\operatorname{Tor}_R(G,R/I)=0$. なのでこの SES から誘導される $\operatorname{Tor}_R(-,R/I)$ の LES を考えると, $K\otimes (R/I)\cong K/IK=0$ が得られる. 再び中山の補題から K=0. よって f :: inj.

補題 **3.4** ([7] Lemma1.2.6)

任意のk-algebra :: A について、次の群同型がある.

$$\left\{ \begin{array}{ll} D\text{-automorphism of }A\otimes_kD\\ \text{inducing identity on }A \end{array} \right\}\cong \mathrm{Der}_k(A).$$

D-automorphism of $A \otimes_k D$ のことを infinitesimal automorphism と呼ぶ.

(証明). 仮定から automorphism of $A \otimes_k D = A[\epsilon]$ は D-module homomorphism で, $\operatorname{mod} \epsilon A \otimes (\epsilon D)$ を合成すると identity になる. したがって次のように書ける.

$$\theta(x) = x + \epsilon D(x).$$

 θ が積を保つことと *D*-module homo. であることから, $D: A \otimes D \to A:: D$ -derivation.

 $\Omega_{A\otimes_k D/D}\cong\Omega_{A/k}\otimes_k D$ に注意すると, θ と $\mathrm{Der}_k(A)$ の対応が分かる.この対応が群準同型であることは明らか.

定理 **3.5** ([7] Prop1.2.9)

X:: separated nonsingular scheme of finite type over k とする。特に, X:: nonsingular (abstruct) variety over K であればよい。この時,first oder deformation of X の同値類は $H^1(X,\mathcal{T}_X)$ の元と一対一に対応する。

(証明). \mathcal{X} :: first oder deformation of X を任意の取る. そして affine open cover of X:: $\{U_i\}_{i\in I}$ を任意に取る. この cover についての Čech cohomology を考えていく.

今, $\mathcal{X}|_{U_i}$:: first order deformation of U_i . 定理 (3.2) より, $\theta_i:U_i\times_k\mathbb{I}\to\mathcal{X}|_{U_i}$ が得られる. これを用いて, 各 $i,j\in I$ について

$$\theta_{ij} = \theta_i^{-1} \circ \theta_j : U_{ij} \times \mathbb{I} \to U_{ij} \times \mathbb{I}$$

が得られる。ただし $U_{ij}=U_i\cap U_j$ (以降の U_{ijk} なども同様)。補題 (3.4) から,これは $d_{ij}\in\Gamma(U_{ij},\mathcal{T}_X)$ に対応する.

 θ_{ij} は貼り合わせることが出来るのだから、Gluing Lemma を参照すれば $\theta_{ij}\theta_{jk}\theta_{ik}^{-1}=\mathrm{id}_{U_{ijk}\times\mathbb{I}}$ が得られる、補題 (3.4) の準同型で写せば、

$$d_{ij} + d_{jk} - d_{ik} = 0$$

すなわち Čeck 1-cocycle condition が得られる.

first order deformation of X が 2 つあり,その間に同型があるとしよう: $\Psi: \mathcal{X} \to \mathcal{X}'$. \mathcal{X}' について θ'_{ij}, d'_{ij} を \mathcal{X} 同様に定める.次の infiniterimal automorphism を考える.

$$\alpha_i = \theta_i' \circ \Psi|_{U_i} \circ \theta_i : U_i \times \mathbb{I} \to \mathcal{X}|_{U_i} \to \mathcal{X}'|_{U_i} \to U_i \times \mathbb{I}.$$

 α_i に $a_i \in \Gamma(U_i, \mathcal{T}_X)$ が対応しているとする. 計算すると $(\alpha_i|_{U_{ij}})^{-1}\theta'_{ij}(\alpha_j|_{U_{ij}}) = \theta_{ij}$ が得られる. すなわち,

$$d'_{ij} - d_{ij} = a_i - a_j.$$

よって $\{d_{ij}\}$ の同値類と $\{d'_{ij}\}$ の同値類は $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$ の中で等しい.

以上より、 \mathcal{X} から $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$ の元への対応は単射的である。逆に $\{d_{ij}\}$ から $\{\theta_{ij}\}$ の対応、 θ_{ij} による $U_i \times \mathbb{I}$ の貼り合わせへと手順を遡れば、 $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$ の元と first order deformation of X への対応が全射だと分かる。

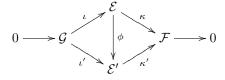
最後に,[2] Thm III.4.5 から
$$\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)\cong H^1(X,\mathcal{T}_X)$$
.

4 Extension of Sheaves

定義 **4.1** (Extension of Sheaves) (i) $\mathcal{F}, \mathcal{G} :: \mathcal{O}_X$ -module on ringed space X とする. extension of \mathcal{F} by \mathcal{G} とは、次のような完全列のこと.

$$(\mathcal{E}, \iota, \kappa): 0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

(ii) $(\mathcal{E}, \iota, \kappa) \to (\mathcal{E}', \iota', \kappa')$:: homomorphism of extensions of \mathcal{F} by \mathcal{G} とは、次の図式を可換にする homomorphism of sheaves :: $\phi: \mathcal{E} \to \mathcal{E}'$ のこと.



(iii) $f: \mathcal{F}' \to \mathcal{F}$ と $(\mathcal{E}, \iota, \kappa)$:: extension of \mathcal{F} by \mathcal{G} について, $f^*\mathcal{E}$:: pullback of \mathcal{E} by f を, f と $\kappa: \mathcal{E} \to \mathcal{F}$ の pullback とする.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow f^* \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F}' \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad$$

 $f^*\mathcal{E} \subseteq \mathcal{E} \oplus \mathcal{G}'$ とすると、 $\mathcal{G} \to f^*\mathcal{E}$ は $g \mapsto (\iota(g), 0)$ と書ける.

(iv) $g: \mathcal{G} \to \mathcal{G}' \ \succeq (\mathcal{E}, \iota, \kappa) ::$ extension of \mathcal{F} by \mathcal{G} について, $g_*\mathcal{E}$:: pushfoward of \mathcal{E} by g を, g と $\iota: \mathcal{G} \to \mathcal{E}$ の pushout とする.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow g \qquad \downarrow \qquad \parallel$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow g_{\star} \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

 $g_*\mathcal{E} \subseteq (\mathcal{E} \oplus \mathcal{G}')/\mathcal{S}$ とすると、 $g_*\mathcal{E} \to \mathcal{F}$ は $[e,g'] \mapsto \kappa(e)$ と書ける.

extension of \mathcal{F} by \mathcal{G} が成す集合を $E(\mathcal{F},\mathcal{G})$ と書く.

定理 4.2

 $\mathcal{F},\mathcal{G}::\mathcal{O}_X$ -modules on ringed scheme :: X とする. この時, 全単射 $\Phi: E(\mathcal{F},\mathcal{G}) \to \operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{E},\mathcal{G})$ が存在する.

これは有名な結果なので証明を書かない. 例えば [2] ExIII.6.1 に証明の方針が述べられているし、加群の場合の類似の結果としては [9] pp.259-264 に詳しい証明がある.

定義 **4.3**(1) split extesion of \mathcal{F} by \mathcal{G} を $0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}$ あるいは単に 0 と書く.

$$0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}: 0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{F} \oplus \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

- (2) $(\mathcal{E}, \iota, \kappa)$:: extension of sheaves について, $-\mathcal{E} := (\mathcal{E}, -\iota, \kappa)$ と定める.
- (3) (The Baer sum) $(\mathcal{E}, \iota, \kappa), (\mathcal{E}', \iota', \kappa')$:: extensions of \mathcal{F} by \mathcal{G} に対し、 $\mathcal{E} + \mathcal{E}'$ を以下のように定める.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \oplus \mathcal{G} \xrightarrow{\iota \oplus \iota'} \mathcal{E} \oplus \mathcal{E}' \xrightarrow{\kappa \oplus \kappa'} \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\nabla \downarrow \qquad \downarrow$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{M} \longrightarrow \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

ただし $\Delta: a \mapsto (a, a), \nabla: (a, b) \mapsto a + b$.

補題 4.4

以下の図式が可換であり、各行は完全であるとする.

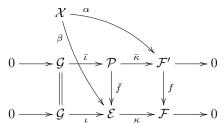
$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{P} \longrightarrow \mathcal{F}' \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow f$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

この時, \mathcal{P} は pullback of f and κ . 双対により, pushback についても同様の命題が成り立つ.

(証明). 以下, $x \in \mathcal{X}$ と書いたら, x は適当な開集合 U 上の \mathcal{X} の section :: $x \in \mathcal{X}(U)$ を意味する. 各射に次のように名前を付ける.



- $\blacksquare \phi: \mathcal{X} \to \mathcal{P}$ の構成. 任意の $x \in \mathcal{X}$ をとり、これに対して $y \in \mathcal{P}$ を以下のように定める.
 - 1. x' を $\kappa(x') = \alpha(x)$ なるものとする. κ :: surj ゆえ x' が存在することに注意.

3. $p = x' + \bar{\iota}(t')$ とする.

こうして得られる写像 $x \mapsto p$ が $\phi: \mathcal{X} \to \mathcal{P}$ を与える.

可換性を確認しよう.

$$\bar{\kappa}(\psi(x)) = \bar{\kappa}(x') + \bar{\kappa}(\bar{\iota}(t')) = \bar{\kappa}(x') = \beta(x),$$

$$\bar{f}(\psi(x)) = \bar{f}(x') + \bar{f}(\bar{\iota}(t')) = \bar{f}(x') + \iota(t') = \bar{f}(x') + \alpha(x) - \bar{f}(x') = \alpha(x).$$

 $\blacksquare \mathcal{X} \to \mathcal{P}$ の一意性. 最後に $\phi, \phi': \mathcal{Z} \to \mathcal{E}f^*$ が同じ可換性を持つと仮定して $\psi = \phi - \phi' = 0$ を示す. 仮定から $\bar{\kappa}\psi = 0, \bar{f}\psi = 0$ が成立する. まず前者から

$$\operatorname{im} \psi \subseteq \ker \bar{\kappa} = \operatorname{im} \bar{\iota}$$

なので任意の $x \in \mathcal{X}$ に対して $g \in \mathcal{G}$ が存在し、 $\bar{\iota}(g) = \psi(x)$ となる。図式の可換性から次が成立する.

$$\iota(g) = \bar{f}\bar{\iota}(g) = \bar{f}\psi(x) = 0.$$

行の完全性から ι は単射なので g=0. 任意の x に対して $\psi(x)=\bar{\iota}(g)=\bar{\iota}(0)=0$. すなわち $\psi=0$.

補題 4.5

 $\mathcal{F},\mathcal{G}::\mathcal{O}_X$ -modules on ringed scheme :: X とする. この時, $E(\mathcal{F},\mathcal{G})$ には加法群の構造が定まる.

(証明). $0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}$ が Bear sum についての単位元であること, $-\mathcal{E}$ が逆元であること,結合律が成り立つこと,可換性を確かめる.

補題 4.6

全単射 $\Phi: E(\mathcal{F}, \mathcal{G}) \to \operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_{\mathbf{Y}}}(\mathcal{E}, \mathcal{G})$ は加法群の間の同型である.

補題 4.7

 $g, g': \mathcal{G} \to \mathcal{G}'$ と、extension of \mathcal{F} by \mathcal{G} をとる.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

この時, $g_*\mathcal{E} + g'_*\mathcal{E} = (g+g')_*\mathcal{E}$.

(証明). $g_*\mathcal{E} + g'_*\mathcal{E}$ は以下の pullback/pushout diagram に収まる (fit).

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \oplus \mathcal{G} \xrightarrow{\iota \oplus \iota'} \mathcal{E} \oplus \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa \oplus \kappa'} \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$g \oplus g' \downarrow \qquad \text{p.o.} \qquad \downarrow \qquad \qquad \parallel$$

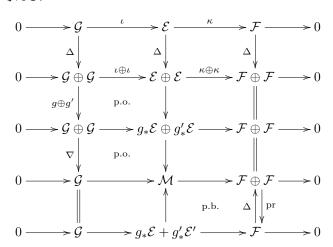
$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \oplus \mathcal{G} \longrightarrow g_* \mathcal{E} \oplus g'_* \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\nabla \downarrow \qquad \text{p.o.} \qquad \downarrow \qquad \qquad \parallel$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{M} \longrightarrow \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

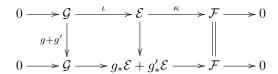
$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \uparrow \qquad \qquad \uparrow \qquad \qquad \uparrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

一行増やして次の図式を考える.



左端の縦の射 $\Delta \circ (g \oplus g') \circ \nabla$ は g + g' に等しい^{†4}. また、右端の縦の射 $\Delta \circ$ pr は id_F に等しい.さらに中央最上部の \mathcal{E} から \mathcal{M} への射と、同じ \mathcal{E} から右下の $\mathcal{E} \oplus \mathcal{F}$ への射を見ると、pullback の普遍性から所望の射 $\mathcal{E} \to g_*\mathcal{E} + g'_*\mathcal{E}$ の存在が言える.

まとめて,以下の可換図式が得られた.



補題 (4.4) から左の四角形は pushout diagram であり、 pushout の普遍性から $g_*\mathcal{E} + g_*'\mathcal{E} \cong (g+g')_*\mathcal{E}$. $\mathbf{g}_*(-\mathcal{E}) = -g_*\mathcal{E},$

5 First Order Deformation of a Local Complete Intersection.

この節は 5.11 を証明するための必要最低限の定義と命題のまとめである。元の命題と比較して,このノートでは X を \mathbb{C} 上のものに限定し,deformation も一般の local artinian ring ではなく $D=\mathbb{C}[\epsilon]$ に限定している。したがって formal deformation([8] 6.1), abstruct lifting([8] 4.2), first order deformation が一致している。

以下,この節ではXを以下のようなものとする([8] Hypotheses4.1).

- flat,
- generically smooth,
- local complete intersection,
- finite type

scheme over \mathbb{C} .

特に stable curve over ℂ はこれらの条件を満たす.

^{†4} この等式を元に考えて一行増やした.

"local complete intersection"の定義を改めて書き下しておく.

定義 5.1 ((local) complete intersection [8] p.21, [2] p.185)

X:: scheme of finite type over $\mathbb C$ が complete intersection であるとは次が成立すること: X は P:: smooth scheme over $\mathbb C$ ([2] III.10) に埋め込まれ,さらに ideal sheaf:: $\ker(X \hookrightarrow P)$ が $\operatorname{codim}(P,X)$ 個の global section で生成されること ([2] p.121).

X:: scheme of finite type over $\mathbb C$ が locally complete intersection であるとは $\mathfrak U$:: open covering of X が存在し、任意の $U \in \mathfrak U$ が complete intersection であること.

議論は、 $\nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$ 、 $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$, $e(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$ の対応の連鎖である。これらはいずれも first order deformations $:: \mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2$ の「差」を表現する量である。ここでの「差」の意味を理解するには、最初に命題 (5.7)、(5.8) のステートメントを見るのが良い。そして自明な first order deformation of $X:: X \times D$ と与えられた first order deformation の「差」である $e(\mathcal{X},X \times D)$ によって first order deformation of X を分類する(定義 5.10).

5.1 $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$

定義 5.2

X:: complete intersection over $\mathbb C$ embedded in P とする. これの ideal sheaf を $\mathcal I\subseteq\mathcal O_P$ とする. $\mathcal X_1,\mathcal X_2::$ first order deformation of X とすると, $\mathcal X_1,\mathcal X_1::$ embedded in P となる. そこで ideal sheaf を それぞれ $\mathcal I_1,\mathcal I_2\subseteq\mathcal O_P$ とする. first order deformation of X の定義から, $\mathcal I_i/\epsilon\mathcal I_i\cong\mathcal I$ (i=1,2).

写像 $\mathcal{I} \to (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$ を以下のように定める. まず、 $\langle U, f, \epsilon \rangle \mathcal{I}$ に対し、

$$\langle U, \tilde{f}_i \rangle \mod \epsilon \mathcal{I}_i = \langle U, f \rangle \ (i = 1, 2)$$

となる $\langle U, \tilde{f}_i \rangle$ が存在する. そこで

$$\langle U, f \rangle \mapsto \langle U, \tilde{f}_1 - \tilde{f}_2 \rangle \mod(\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{I} \in (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} (\mathcal{O}_P / \mathcal{I}) = (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$$

と写す. これは \tilde{f}_i のとり方に依らず, well-defined. この写像を $\nu(X_1, X_1)$ と書く.

以下の \mathbb{C} -module としての同型があるため、 $\nu(X_1, X_2)$ を以下のいずれの集合の元ともみなす.

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_{P}}(\mathcal{I}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{X})$$

$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_{P}}(\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{X})$$

$$\cong H^{0}(X, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

$$\cong (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} H^{0}(X, (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

$$\cong H^{0}(X, (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

命題 **5.3** ([8] Prop2.8a,b,c,d,e)

X :: complete intersection embedded in P とする.

- (a) $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) = 0 \iff \mathcal{X}_1 = \mathcal{X}_2.$
- (b) $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) + \nu(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_3) = \nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_3).$
- (c) $\nu(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_1) = -\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$.
- (d) 任意の \mathcal{X} :: first order deformation of X, 任意の $\nu \in H^0(X,(\mathcal{I}/\mathcal{I}^2)^{\hat{}})$ に対し, \mathcal{Y} :: first order deformation of X が存在して, $\nu = \nu(\mathcal{X},\mathcal{Y})$ となる.

(証明). (d) のみ証明する. 他は自明であろう.

5.2 $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$

補題 5.4

X:: complete intersection over \mathbb{C} embedded in P とし,ideal sheaf は $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{O}_P$ であるとする.この時, $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$:: locally free sheaf of rank $n := \dim X$.

(証明). local な問題なので、 $x \in X \subset P$ での $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$ の stalk が free module であることを示す。 $A := \mathcal{O}_{P,x}$ とし、 $I := \mathcal{I}_x$ を生成する regular sequence を x_1, \ldots, x_r とする.

次の写像を考える.

$$\phi: \quad (A/I)^{\oplus n} \quad \to \quad I/I^2$$
$$(\bar{a}_1, \dots, \bar{a}_r) \quad \mapsto \quad \sum \bar{a}_i x_i$$

 ϕ :: surjective は明らかなので injective であることを示す.

 $A^{\oplus n} \to (A/I)^{\oplus n}$ と ϕ の合成で 0 になる元を $(a_1,\ldots,a_r) \in A^{\oplus n}$ とする。各 $i=1,\ldots,r$ について $a_i \in I$ を示す。今, $\sum a_i x_i \in I^2$ なので (TODO)

$$a_r x_r = 0 \text{ in } A/(x_1, \dots, x_{r-1}).$$

 x_1,\ldots,x_r :: regular sequence より、 x_r は $A/(x_1,\ldots,x_{r-1})$ において non-zerodivisor なので、 $a_r=0$ in $A/(x_1,\ldots,x_{r-1})$. よって $a_r\in(x_1,\ldots,x_{r-1})\subseteq I$. [5] p.127 より、各 a_1,\ldots,a_{r-1} についても同様の議論が出来る.

補題 5.5 (First Fundamental Exact Sequence)

X :: **complete intersection** over \mathbb{C} embedded in P とし,ideal sheaf は $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{O}_P$ であるとする.この時,以下は exact.

$$0 \longrightarrow \mathcal{I}/\mathcal{I}^2 \longrightarrow (\Omega_{P/\mathbb{C}})|_X \longrightarrow \Omega_{X/\mathbb{C}} \longrightarrow 0$$

すなわち, $(\Omega_{P/\mathbb{C}})|_X$:: extension of $\Omega_{X/\mathbb{C}}$ by $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$.

(証明). (TODO) よく知られている通り、最初の射が単射であることを示しさえすれば良い.

定義 5.6

 $U \subseteq X$:: complete intersection over \mathbb{C} embedded in P とする. $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$:: first order deformation of X について、

$$\mathcal{E}(\mathcal{X}_1|_U, \mathcal{X}_2|_U) := \nu(\mathcal{X}_1|_U, \mathcal{X}_2|_U)_*((\Omega_{P/\mathbb{C}})|_X)$$

を extension of $\Omega_{U/\mathbb{C}}$ by $(\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_U$ として定める.

(TODO: 張り合わせが出来ることに言及.) 貼りあわせによって $\mathcal{E}(X_1, X_2)$ を定める.

命題 **5.7** ([8] Prop4.9a,b,c,f)

 $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$:: first order deformations of X とする.

- (a) $\mathcal{E}(\mathcal{X}, \mathcal{X}) \cong 0_{\Omega_{X/\mathbb{C}}, (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_X}$.
- (b) $\mathcal{E}(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_1) = -\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$.
- (c) $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) + \mathcal{E}(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_3) \cong \mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_3)$.
- (d) 任意の \mathcal{E} :: extension of $\Omega_{X/\mathbb{C}}$ by $(\epsilon) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$ と任意の \mathcal{X} :: first order deformation of X に対し,

$$\mathcal{E}\cong\mathcal{E}(\mathcal{X},\mathcal{Y})$$

なる \mathcal{Y} :: first order deformation of X が存在する.

命題 **5.8** ([8] Prop4.10)

 $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$:: first order deformations of X とする. この時, 以下は同値.

- 1. \mathcal{X}_1 と \mathcal{X}_2 は同型.
- 2. $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$:: split extension.

[8] pp.22-23 では更に詳しく,同型 $\mathcal{X}_1 \xrightarrow{\cong} \mathcal{X}_2$ が $\operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$ の元に一対一対応することが述べられている.この集合は $\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$ の中で 0 に潰れていることに注意.

5.3 $e(X_1, X_2)$

定義 5.9

 $T^i(X) = \operatorname{Ext}^i_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$ とおく. \mathcal{X} :: first order deformation of X に対し,

$$e(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) \in \operatorname{Ext}^1(\Omega_{X/\mathbb{C}}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X) \cong (\epsilon D) \otimes T^1(X) \cong T^1(X) \cong \operatorname{Hom}((\epsilon D)^*, T^1(X))$$

を, $\mathcal{E}(\mathcal{X}, X \times D)$ に対応する元とする (4.2).

補題 (4.6) より、命題 (5.7), (5.8) と同様の命題が $e(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$ についても性質する.

定義 **5.10** (Kodaira-Spencer class/map, [8])

 $T^i(X) = \operatorname{Ext}_{\mathcal{O}_X}^i(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$ とおく. \mathcal{X} :: first order deformation of X に対し,

$$k_{\mathcal{X}} = e(\mathcal{X}, X \times D) \in T^1(X) \cong \operatorname{Hom}((\epsilon D)^*, T^1(X))$$

とおく. この $k_{\mathcal{X}}$ を Kodaira-Spencer class of \mathcal{X} と呼ぶ、対応する写像 $K_{\mathcal{X}}: (\epsilon D)^*, T^1(X)$ を Kodaira-Spencer map of \mathcal{X} と呼ぶ、

5.4 Complete Classification.

定理 5.11

First order deformation of X の同値類と $\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}},\mathcal{O}_X)$ の元は一対一に対応する. (cf. [8] Prop 6.12) (証明). 命題 (5.7), (5.8) より, $\mathcal{X}\mapsto k_{\mathcal{X}}$ がこの対応を与えることは明らか.

系 5.12

X:: nonsingular and have finite dimention ならば、First order deformation of X の同値類と $H^1(X,\mathcal{T}_X)$ の元は一対一に対応する.

(証明). 仮定より、 $\Omega_{X/\mathbb{C}}$:: locally free sehaf of finite rank. したがって [2] PropIII.6.7, Prop II.6.3 から次の同型が成立する.

$$\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_X \otimes \Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X) \cong \operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_X, \mathcal{T}_X \otimes \mathcal{O}_X) \cong H^1(X, \mathcal{T}_X)$$

6 Two Examples of Other Deformation Theories

deformation theory の対象は scheme の他にもある. 例えば、次の二つがある.

- Deformation of a coherent sheaf :: F on a scheme X, over a fixed scheme

 \mathcal{X} :: deformation of X over (S, s_0) とする. deformation of F over X とは, \mathcal{F} :: flat coherent sheaf on \mathcal{X} と homomorphism :: $\phi: \mathcal{F} \to F$ の組であって,誘導される射

$$\phi \otimes_{\mathcal{O}_{\mathcal{X}}} 1_{\mathcal{O}_{\mathcal{X}}} : \mathcal{F} \otimes_{\mathcal{O}_{\mathcal{X}}} \mathcal{O}_{\mathcal{X}} \to F$$

が同型であるもの. (ref. [3] §7, p.53)

- Deformation of a map $f: X \to Y$ with both X and Y fixed -

X,Y:: scheme, $(S,s_0)::$ \mathbb{C} -pointed scheme, $f:X\to Y::$ morphism とする. Deformation of a map $f:X\to Y$ with both X and Y fixed とは morphism $:: \bar{f}:X\times S\to Y\times S$ であって, $\bar{f}|_{X\times\{s_0\}}=f$ であるもの. (ref. [4]p.93)

それぞれ、first order deformation が成す空間が分かっている.

定理 **6.1** ([3] Thm2.7)

X:: scheme over \mathbb{C} , F:: coherent sheaf on X とする. この時, F の first order deformation とは, \mathcal{F} :: coherent sheaf on $\mathcal{X} = X \times_{\mathbb{C}} D$ と homomorphism :: $\phi : F \to \mathcal{F}$ の組であって誘導される射 $\phi \otimes_D 1_{\mathbb{C}} : \mathcal{F} \otimes \mathbb{C} \to F$ が同型であるものとする.

この時, first order deformation of F over \mathcal{X} の同型類と $\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(F,F)$ の元とが, 一対一対応する.

系 **6.2** ([3] Prop2.6)

上の定理で F を invertible sheaf に限定すると、first order deformation of F over $\mathcal{X} = X \times D$ の同型類は $H^1(X, \mathcal{O}_X)$ の元と一対一対応する.

(証明). 系 (5.12) の証明と全く同様.

定理 6.3

X,Y: fiexed scheme, $f:X\to Y$ をとる. この時, first order deformation of a map f with both X and Y fixed の同型類と, $H^0(X,f^*\mathcal{T}_Y)$ の元とが一対一対応する.

こちらについては詳しい文献が見つかっていない. しかし, "Deformation of a map $f: X \to Y$ with only Y fixed" については、解析的な場合について [1] §8 で述べられている.

7 Functor of Artin Rings - Abstruct Deformation Theory

3 つの圏を次のように定める. L:: local noetherian \mathbb{C} -algebras with residue field \mathbb{C} とする.

(LA)_L: the category of local artinian L-algebras with residue field \mathbb{C} .

 $(CLN)_L$: the category of complete local noetherian L-algebras with residue field \mathbb{C} .

 $(LN)_L$: the category of local noetherian L-algebras with residue field \mathbb{C} .

 $L = \mathbb{C}$ の時は添字を略す. (ref. [7] p.1)

 $(LA)_L \subset (CLN)_L \subset (LN)_L$ という包含関係があることに注意.

定義 7.1 ([7] §2.2)

以下のような functor を functor of artin rings と呼ぶ.

$$F: (LA)_L \to (Sets).$$

ここで $L \in (CLN)$.

 $F(\mathbb{C})$ が 1 元集合 (singleton) ならば、F は特に predeformation functor と呼ばれる.

F が functor

$$\operatorname{Hom}_{(\operatorname{CLN})_{L}}(R,-) \qquad R \in (\operatorname{CLN})_{L}$$

と同型である時, F:: prorepresentable と言う.

定義 7.2 ([7] §2.2)

formal element semiuniversal formal element universal formal element

predeformation functor :: F が (semi)universal formal element を持つか,ということについては,以下の定理が大変有用である.逆に以下の定理が predeformation functor を考える重要性を示している.

定理 7.3 ([7] Thm 2.3.2, p.56)

参考文献

- [1] Enrico Arbarello, Maurizio Cornalba, and Phillip Griffiths. Geometry of Algebraic Curves: Volume II with a contribution by Joseph Daniel Harris (Grundlehren der mathematischen Wissenschaften). Springer, 2011 edition, 4 2011.
- [2] Robin Hartshorne. Algebraic Geometry (Graduate Texts in Mathematics. 52). Springer, 1st ed. 1977. corr. 8th printing 1997 edition, 4 1997.
- [3] Robin Hartshorne. Deformation Theory (Graduate Texts in Mathematics). Springer, 2010 edition, 12 2009.

- [4] Ian Morrison Joe Harris. *Moduli of Curves (Graduate Texts in Mathematics)*. Springer, 1998 edition, 8 1998.
- [5] Hideyuki Matsumura. Commutative Ring Theory (Cambridge Studies in Advanced Mathematics). Cambridge University Press, revised edition, 5 1989.
- [6] David Mumford Pierre Deligne. The irreducibility of the space of curves of given genus. *Publications Mathématiques de l'Institut des Hautes Études Scientifiques*, Vol. 36, No. 1, pp. 75–109, Jan 1969.
- [7] Edoardo Sernesi. Deformations of Algebraic Schemes (Grundlehren der mathematischen Wissenschaften). Springer, 11 2010.
- [8] Angelo Vistoli. The deformation theory of local complete intersections. https://arxiv.org/abs/alg-geom/9703008.
- [9] 志甫淳. 層とホモロジー代数 (共立講座 数学の魅力). 共立出版, 1 2016.